「森とアート」から日本の曼陀羅世界へ

2021.10，16

様々な芸術作品・芸能・芸術行為は自然界の森の如くに、生態系の循環・連鎖のように存在する。自然界の森は「曼荼羅」と命名される広大無辺の人智の及ばぬ世界の秘密を表象（表現）している生きたアート（芸術）である。森を歩き、味わい、鑑賞する行為、手入れの行為は、その行為そのものがアート（技術・芸術）であり、参入する心の内なるアート（技術・芸術）は表象の内実を開く「鑰」であり、その鑰を制作・構築するのもまたアート（技術であり芸術）である。芸術の森も、自然界の森も参入するには「鑰」を持つことが必要。この鑰を目に見える形にした絵画や耳に聞こえる形にした音楽、触に感じる形にした彫刻、味わう形の食、嗅にした香などなど、森にたくさんの生き物が生息するように、さまざまな感覚に伝わる芸術行為と作品がある。

鎌田先生は、「生態系サービスの循環と連鎖とネットワークは、まさに「曼荼羅」そのもので、アートはそのマンダラ世界に参入していくパスワードのようなマントラ（真言・独自の鑰語）かとおもいます。」と書かれていた。アートを「鑰語」と表した事は素晴らしい発見であると思った。この用語を見て、まず浮かんだのは、空海の「秘蔵宝鑰」である。まさに曼荼羅を読み解くためのこころの行為であるが、文庫本の説明には「秘められた蔵（真の心の教え）を開くカギの意で、真言密教を指す。空海は、宇宙の中心・大日如来の明るい光の中で、こころを正しく見直せば、毎日が新しい生活になる、と真言密教の効用を平易に説く。」（角川ソフィア文庫：加藤純隆・加藤清一訳）

「鑰語」は表現者と鑑賞者の間に発生するのではないか。これはシンボル（象徴）作用とは区別したほうが良いのではないかとも思った。記号論的な展開にしたくないからである。記号とその解釈、あるは記号による置き換えでは語れない現象にこそ、「鑰語」は相応しく、無神論的帰結になりがちな記号作用の計算的関係世界は、有機的な「曼荼羅」とは異なり、人間の知的作業による世界の説明になる傾向があると思われるからである。それは無神論的な思考に導くようにも思われる。わたしは無神論者ではない。一神教も多神教も民間信仰やアニミズムも興味深く、そこでの芸能・芸術行為は置き換え不能な現象として存在していると思う。アートは人間の解釈を待つ事物や現象ではないからである。ラベルも要らない。相互の交流・変容構造にこそ曼荼羅的意味生成の原理が発生すると思う。真の参入であれば、会話（交流）が成立するはずである。曼荼羅世界からの答えであり自身が組み込まれた大きな宇宙連関からのエネルギーや力でもある。こうした現象に「神」などのラベルをはらずに現象そのものを味わい曼荼羅世界へと帰す調和的連関の中にこそ世界は秘密を開示し、真理感情に裏付けられた個人的体験の芸術行為があるのではないか。これは他者からは見えない身体の内部で起こる身心の変容であり、先人にはわかる身心技術でもあり身心の変化でもある。この変化を診断できる人は審神者なのではないだろうか。

空海は三十一歳で中国に渡り、当時の唐の都、長安（今の西安）青竜寺の恵果から密教を授かるが、その際に経典や法具とともにこの両界曼荼羅も授与された、恵果は空海にこう伝えた、「密教の内容は、まことに深くて広大なので、とうてい文字やことばではあらわし切れない。そこで、一般の人々には図画を用いて知らしめるのだ」「密蔵深玄にして翰墨に載せがたし。さらに図画を仮りて悟らざるに開示す。」（『御請来目録』）

空海のもたらした中国仏教の両界曼荼羅の美しい秩序だった抽象度の高い構図に比すると日本の神道曼陀羅は、月（天体）や自然界の中のさまざまな生き物、森、川、鳥、樹木、獣たち、人とともに仏たちが具体的に描かれている。鎌田先生の述べた「生態系サービスの循環と連鎖とネットワーク」が描かれているのではないかと思う。私個人は「春日鹿曼荼羅」が大好きである。鹿の上に見えない存在（建御雷神）を乗せてやってきた話と現在の奈良公園の原生林や鹿、社や観光客までが曼荼羅に見えるようにも思われる。（木村はるみ拝）